
星のカービィ ゼロの復讐劇Ⅱ -復活-

零物質

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカービィ ゼロの復讐劇ⅠⅠ - 復活 -

【Nコード】

N3686G

【作者名】

零物質

【あらすじ】

ついに新たな舞台へ・・・舞台は9か月後の平和な平和なプランド。謎の人物がギャラクティックノヴァに恐るべき願い事を行い、脅威なる計画が動き出す・・・！！それに気づかないドロッチェ団はある目的のためにキラメキマウンテンへと目指す・・・。はたして、ドロッチェ団に襲いかかる様々な出来事とは・・・！？そして、カービィは・・・！？これは見逃せないぞ！！

（前書き）

この小説は「星のカービィ ゼロの復讐劇」の続編です。

この小説の内容は前作を見ないとわからないところが多々あります。
まだ前作を未読の方は前作の「星のカービィ ゼロの復讐劇」を読むことをお勧めします。

カービィとゼロが宇宙で消滅してから9か月が経った……。この9ヶ月間、苦しみながらも仲間たちは懸命に生きていた。いつかカービィに会えると信じて……。

未来に希望を持って……。

いつかカービィに会えるのなら――

星のカービィ ゼロの復讐劇ⅠⅠ - 復活 -

序章「脅威なる願い」

キララアアアーンッ

どこかで光り輝いているなにかが回っている……。

あのギャラクティックスター16個が回っているのである。

そう、そこはあの伝説の「ギャラクティックノヴァ」の出現地なのである。

そこで一体だれがやっているのだろうか……!?

シューウーンッ

パアアーンッ

その16個のギャラクティックスターはギャラクティックノヴァの出現地へと飛び込み、そしてついにギャラクティックノヴァが中心に部品が一瞬で結集し、元の姿になってある人物の目の前に現れる……!!

あら? そういえばギャラクティックノヴァはあの爆発で消滅したはずなのに……。

そう、実はギヤラクティックノヴァは何度破壊されてもよみがえるシステムがあるのだ。

永遠に存在し続けるからこそ伝説は続くのである。

ギヤラクティックノヴァ「READY・>」

ギヤラクティックノヴァ「あなたの・ねがいを・ひとつダケ・カナえて・さしあげマス・・・・>」

???「ああ、んならミラクルマターを蘇らせてほしいのサ!!!」
ギヤラクティックノヴァ「OK>3・2・1・GO!>」

ピッキヤアアアンツ!!!

あたりが真つ暗な宇宙を光で包みこむ・・・。
その光の先で時空間がゆがみ、その先から例のあいつが現れる・・・。

ゴゴゴゴゴ・・・

ミラクルマター「ウウウ・・・。ハッ!?コ、ココハ・・・!?!」

???「やあ!!!はじめまして!!!」

ミラクルマター「オ、オマエハダレダ!?!」

???「僕はゼロのお友達なのサ!!!」

ミラクルマター「コ、コウティドノノ・・・?アリエン!!!コウティドノハトモダチヲツクルヨウナカタデハ・・・」

???「ちよつと黙ってほしいのサ」

バアアアーツ!!

ミラクルマター「ナ、ナニヲ・・・!?グアアアアーツ!!!」

謎の人物はミラクルマターに洗脳術をかけ、われのものにする。

???「ちよつと利用してもらうのサ・・・。僕のお友達の復活のためにね・・・」

ついに壮大なる野望が動き出す・・・！！

第1章「悪夢の予兆」

カービィの活躍から9カ月がたち、ププランドはカービィのおかげで今も平和が続いている。

こんな時に壮大な野望が動き出そうとしているのに――

そんな中、ププランドから1つの集団がある目的のためにププランドから出ようとしていた・・・。

そう――「ドロツチェ団」である！！

ドロツチェ「よし、次の目的地を確認しよう！！」

スピン「あ、ちょっと待ってくださいでチュ・・・。ええっと・・・あ、次は「キラメキマウンテン」でチュ！！」

スピンは甲高い声で団長に向かって言う。

ドロツチェ「ふうむ・・・キラメキマウンテンか・・・。」

ストロン「進路はどうするんだも？」

ドロツチェ「そうだった・・・。進路をどうするか・・・。ふうむう・・・。」

ドロツチェは、ロダンの「考える人」のような体勢で考え込む。

ドロツチェ「んんん・・・。んならこんなのはどうだ？おい、ちょっと貸せ。」

スピン「あ、はい・・・。」

ドロツチェはスピンから地図を取り上げ、赤ペンで進路を書き込む。

カキカキ・・・

ドロツチエ「こんなのはとうだ？」

ドロツチエは、比較的楽な道のなかで一番最短な道のりを書き込んだ。
だ。

その進路をみんなに見せた。

ドク「ふむふむ・・・。これはなかなかいい進路なのじゃ。」

ストロン「んじゃ、この道のりで決定だもー!!」

ドロツチエ「んじゃあこの道のりで出発するとするか・・・。」

ドロツチエ達は早速最初の一步を踏み出し、ついにププブランドの外へと出た。

ドロツチエは後ろを振り返り、ププブランドをしばらく見る。

ドロツチエ「・・・さらば・・・第2の故郷「ププブランド」よ!!」

ドロツチエはププブランドに別れの言葉を継げ、ププブランドを後にした・・・。

ドロツチエ「んじゃ、とりあえず確認しとくがキラメキマウンテンはどれくらい距離だ？」

ドク「ええつと・・・距離はだいたい16kmじゃ。」

ドロツチエ「ほお。そんなに距離はないな・・・。」

ドロツチエは目の前を見る。

その目の前にはあのキラメキマウンテンの頂^{いただき}が見える・・・。

ドロツチエ「・・・目指すは頂上・・・！！あそこに伝説の鏡の国に通じる扉があるはずだ・・・。」

ドロツチエはそうつぶやき、決心する。

ドロツチエ「たったの16kmなんだ！！ダッシュで向かうぞ！！」
スピン「はいでチュ！！」

ドロツチエ団はストロン以外は目にもとまらぬ速さであの山へと向かった。

そして16kmという距離を2分もかからずにたどり着いた。

ドロツチエ「はあ・・・はあ・・・とりあえずふもとに・・・やってきたな・・・。」

ドク「わしは疲れてはいないが、電気を相当食ってしまったようじや・・・。」

ドロツチエ達は相当疲れた様子で木にもたれかかった。
しばらくしてストロンが到着した。

ストロン「はあ・・・はあ・・・。うおっ！！」
ズドオーンツ

ドロツチエ「わあっ！！」

ストロンはうつ伏せで倒れこみ、ドロツチエ達よりもゼエゼエと息切れをしている。

ストロン「だんちよっ・・・。みんな速いもっ・・・。ゴハアツ・・・。」

ストロンは口から喉に詰まったタンだのよだれだのいろいろと出てきた。

ドロツチェ「ああ、急ぎすぎた……。」「

ストロン「とりあえず休みたいも……。」「

ドロツチェ「んじゃあそうするとするか……。」「

ドロツチェはみんなにしばらく休むよう伝え、木の下で休むこととなった……。――

そして20分後――

ドロツチェ「……。よし、この時間帯になるとラジオでニュースがあるはずだ。」「

ストロン「ええ……。」「

スピン「ニュ、ニュース……。？興味ないでチュよ……。」「

ストロンとスピンは首をラジオと反対側に向ける。

ドク「さあて、今回どんなのがあるかのお？」「

ドロツチェ「さあな。とりあえずスイッチオン。」「

ポチッ

ザザザザアアアーツ！！！

ドロツチェ「ぎゅあああーっ！！！！」

ドロツチェ団の周りにラジオの雑音が響き渡る。

ドク「な、なんじゃこの雑音はああーっ！！！」

ストロン「ニヨハアアーツ！！！！」

スピン「ピギヤアーツ！！！？」

みんな自分の耳をふさぎ、じたばたと騒ぎたてる。
そう、彼らは異常に聴覚がいいのだ!!
それ故に欠点もある。それこそがこのことである!!

ザザザザアアーツ!!

ドロツチェ「ぐ・・・この・・・ぐりゃああ!!」
ガシッ

ドロツチェはラジオのダイヤルをつかみ、ぐるぐるとまわして番組を設定する。

カチカチカチ・・・

へこんばんは。イヴニングラジオのお時間です。ㄱ

ドロツチェ「ひゅう・・・」

スピ「団長!!なにやったんでチュか!?!ぼくたちまで巻き添いしといて・・・」

スピンはガミガミと文句を言う。

が、ドロツチェはその文句をスルーした。

ドロツチェ「とりあえず許せ。んじゃあさつそく聞こうか・・・」

ドロツチェはラジオに早速耳を傾ける。

へまずはこちらからです。卿、ププランドの東地方付近で正十二面体の全身が白い、赤い目がたくさんある謎の物体が上空から空爆する事件がありました。詳細が入り次第お伝えいたします。ㄱ

ドロツチェ「正12面体・・・?何の話だ・・・?」

ドロツチェは首をかしげる。

へでは、続いてのニュースです。・・・
ブチッ

ドロツチェはスイッチを切り、みんなに先ほどのことを話しかける。

ドロツチェ「おい、聞いたか？」

スピン「僕は聞いてないっチュよ。」

ドク「ああ、正12面体の奴じゃろ？聞いたわい。」

ドロツチェ「いったい何なんだろうな・・・。」

ドロツチェとドクだけでそのことについて話し合ったが、残りのあの2人は興味が全くないためよそに顔を向かせていた。

話していてからしばらくするうちにどろっちえの体が左右にふらりふらり・・・

ドロツチェ「うう・・・。ああいかん、眠気が・・・。」

ドク「言われてみれば確かに眠たいのお・・・。」

ドロツチェ達の瞼は徐々に重くなり、そして深い深い眠りに就くのだった・・・。

この眠気の原因があいつの波動であることを知らずに――

第2章「悪夢の将来は突然に」

翌日――

チュン、チュチュン、チュン

ドロツチェ「う・・・うう・・・？」

最初に起きたのはドロツチェだった。

ドロツチェは目をこすりながら機に手を当てて体を起こし、よっこらせとゆっくりと立つ。

ドロツチェ「お・・・うおゝっ・・・！！ああ、気持ちいいなあ・・・。」

ドロツチェは気持よさそうな顔でおもいきり背伸びをする。
背伸びが終わったところでみんなを起こしに押しかける。

ドロツチェ「おゝい、ドク、ドクウゝ・・・。おゝい、おい、おい、おい・・・。つただから年寄りは・・・。」

ドロツチェは頭をかきむしりながら、なぜかグルリと一回転する。

ドロツチェ「しょうがねえ、スピンから起こそうか・・・。」

ドロツチェはスピンのもとへ足を運ぼうとした。
とその時、ポケットが金色に輝きだした！！

ピッキヤアアアーンッ

ドロツチェ「な、なんだ・・・？。」

ドロツチェはあの羽根をポケットから取り出した。

そう――9か月前に道端で拾い上げたあの「金色の羽根」である！！

ドロツチェはキラキラ輝く「金色の羽根」を見つめる。

ドロツチェ「いったい何の話なんだ。」

そういつた途端、金色の羽根が宙に浮かび、さらに光を増す。

パアアーンツ

ドロツチエ「な．．．！？」

ドク「ん．．．？なんじゃ．．．？」

スピン「おお．．．？」

ストロン「ああ．．．。んお．．．？」

団員のみんなもこの光で起きる。

ドク「．．．ん．．．んのおっ！？な．．．！？」

スピン「な、なんでチュか．．．！？」

ストロン「も、もおおゝ！！」

団員はその光を見て驚く。

ストロン「だ、団長、あれは．．．」

ドロツチエ「わかんねえ．．．。何の話なのか．．．。」

みんなはただただその金色の羽根を見つめるだけだった。
とその時、上空から氷の光線のようなものを撃たれた！！

バアアーツ！！！！

ドロツチエ「うおっ！！」

ドロツチエはすばやく横へとよける。

ドロツチエはそのまま転んで、さつと上を見上げた。

そこには．．．

ミラクルマター「アアア．．．。」

ドロツチェ「正12面体とは、こいつこのことだったのか・・・！？」

ドロツチェ達の目の前に現れたのは、誰かに操られたミラクルマターだった・・・！！

ミラクルマター「ゲオアアーツ・・・。」

ドロツチェ「こいつ、前とは全く違う・・・。」

ボムミラクルマター「ボ・・・ム・・・。」

ミラクルマターはボムとなり、ドロツチェにぎろりとにらみつける・・・。

ドロツチェ「こいつ・・・おれと戦いたいとも言いたいのか・・・！？」

スピン「だ、団長・・・！！」

ドロツチェ「みんな、さがつてろ・・・。」

ドロツチェは団員3人を安全な場所に下がらせ、戦場に立つ・・・。

ドロツチェ「おまたせだ。では、行こうかな・・・？」

ドロツチェはトリプルスターを片手にミラクルマターへと立ち向かう。

戦いが始まった・・・！！

ボムミラクルマター「ボンバータイフーン・・・！！！！」
チユドドドオッ！！

ミラクルマターは大量の核爆弾を雨のようにどんどん落とす。

ダダダダッ

ドロツチェ「そんな爆弾降らせたって一緒だよ。俺を何だと思ってるんだい？」

ドロツチェはトリプルスターを天に突き刺し、思いっきり横に大振りする。

ブオンッ

ドロツチェ「いくぜ！！トライアングルディフェンス！！」

ドロツチェは3つの星を三角に囲んでバリアを作った。

チュドドドオーンッ！！

ボムミラクルマター「ヌオアア・・・！！！！」

ドロツチェ「このドロツチェ様に簡単に勝てるんでも思っなよ！！んじゃ、さっきの爆弾のお返しとでもいきますか。バリアに受けた衝撃の30倍で返してやるよぉ！！「カウンター30」！！」

ドロツチェは先ほどの攻撃の30倍でミラクルマターに勢いよくぶつけた！！

チュツガアアーンッ！！！！

ミラクルマター「ウオオツ・・・！！」

ミラクルマターは一瞬体がよろめく。

この衝撃でコピーも失った。

ドロツチェ「あんまり大したことはねえなあ。んじゃ、とどめの1発とでもいきますか。」

ドロツチェはトリプルスターを片手にミラクルマターのもとへと向かう。

とその時、横から突然弓矢のような光のなにかが大量に飛んできた！！

その光の矢はミラクルマターの体を一気に貫通した！！

ズザザザザアアアーツ！！！！

ミラクルマター「ガガガガガアアアーツ！！！！」

ピッキヤアアアーンツ！！

ドッキヤアアアアーンツ！！！！！！

ミラクルマターは一気に木っ端みじんに粉碎し、ミラクルマターのかけらがどろっちえの周辺に飛び散る。

ガラガラガラ・・・

ドロツチェ「な・・・！？・・・はっ！？」

ドロツチェは光の弓矢を放ったやつに顔を傾けた。
その正体は・・・

第3章「ト・モ・ダ・チ」

ドロツチェが振り向いた先には・・・

ギャラクティクナイト「まずい・・・！！」
シュッ

ドロツチェ「んん・・・？」

ドロツチェは、忍者のように走って飛びさる謎の姿が一瞬視界に入

つたが、追うつもりはなかった。

その逃げた謎の人物がいた場所には、子供が横たわっていた

ドロツチエ「ん・・・？こ、子供・・・？」

ドロツチエは首をかしげながらも、その子供を揺さぶる。

ユサユサ

ドロツチエ「おい、何ねてんだ？起きろ。」

そう言いながら揺らして起こそうとした。

すると、その子供のまぶたが少しずつひらくだす・・・。

「・・・ううん・・・。・・・んお・・・？わあっ！き、ききき、君は誰なのサ！！」

ドロツチエ「（え・・・？ん・・・？）あ、俺ドロツチエだが・・・。
お前は・・・？」

チャイルドマルク「え？ぼく？ああ、僕はマルクなのサ！！よろしくなのサ！！」

ドロツチエ「あ、ああ・・・。」

ドロツチエは「なんだこいつ」的な目でマルクをじっと見つめる。
どうでもよくなったドロツチエはとりあえず団員を呼ぶ。

ドロツチエ「おい、みんな、戻ってきていいぞ。」

ドク「おお、いいのか？」

チャイルドマルク「ありや？仲間もいたの？」

ドロツチエ「うるさいなあ。子供はあっちに行っとけ。ここにいると危ないぞ。」

チャイルドマルク「やだやだやだやだやだやだやだやだやだやだあ

ああーっ！！！！」

マルクは金切声でキンキン騒ぎ立てる。

ドロツチェ「はいはい、わかったわかった！！連れて行ってあげるよ。」

チャイルドマルク「え、ほんと？わーいわーい！！やったのサ！！」
ドロツチェ（やっぱりこいつ完全な子供だ……。見てるこっちが
すんごく恥ずかしい……。）

ドロツチェは真っ赤っかな顔をして、体を震わせる。

ドロツチェ「（こうしちゃあおれん……。）おい、みんな、行くぞ。」

ストロン「おつす、団長！！」

スピン「頂上までレッツゴーでチュよ！！」

ドロツチェ団は今日もキラメキマウンテンの頂上を目指す……。

チャイルドマルク「ああん！！待ってくれなのサ！！」

ドロツチェ「残念だが、子供を相手にする時間はないんでね。はっ！！！！」

ドロツチェはヨーヨー付きのなわを勢いよくなげ、見事マルクを縛り付けた！！

シュルシュルシュルッ

バシィンッ

チャイルドマルク「わあっ！！な、何するのサ！！」

ドロツチェ「子供は基本嫌いなんでね。では、次誰かに会った時は

ほどこいてもらえよ。」

ドロツチエは子供嫌いなために、こんなひどいことをした！！
ドロツチエはそのままその場から立ち去る・・・。

チャイルドマルク「おい！！なにやってくれてんのサっ！！ぐう
う・・・。」

マルクは唇をかみしめ、ぼろぼろと涙が出る・・・。

チャイルドマルク「くっそあん・・・！！ひどいひどいひどい
いひどい！！！！あああゝっ！！あいつを絶対に倒すのサ！！絶対ぶ
ち殺すのサ！！こんなひどいことして・・・。恨むのサ・・・。あ
いつ・・・許せない・・・のサ・・・！！！」

マルクは1日前から今までのことを思い出す。

——1日前

マルクは、あの場所にいた。そう——あのギャラクティックノウ
アの場所に・・・

あの時、ミラクルマターを洗脳した・・・。
だが・・・

マルク「ちよつと利用してもらうのサ・・・。僕のお友達の復活の
ためにね・・・。」

???「ふんっ！！！」

マルク「な、なんなのサ！！！」

マルクが振り向くと、そこにはギャラクティックナイトの姿が・・・

ギヤラクティツクナイト「変なまねはやめることだな。」

マルク「う、うるさいのサ！僕のお友達が苦しんでるのさ！！だから復活させるために・・・。」

ギヤラクティツクナイト「なんともばかげた真似だ・・・。これでねじふせる。ドリルギヤラックス。」

ギヤラクティツクナイトは体をまげて竜巻のようにグルグルとまわし、剣をマルクに向けながら突撃する。

マルク「や、やめるのサア！！うわあっ！！」
ズッシャアアアーツ！！！！

マルクは両翼ともぼろぼろに引き裂かれ、全身がぼろぼろになっていき、チャイルド体系となる。

チャイルドマルク「ああ・・・。」

マルクはそのまま流され、24時間後にポップスターにたどりつく・・・。

——恨む・・・みんなを・・・

マルクは改めに今の自分の現状を知り、身の回りのすべてを恨む。

チャイルドマルク「すべてを・・・恨む・・・僕は・・・すべてを壊すのサ・・・。すべてを・・・絶望に・・・！！」

恨みに染まったマルクは、その思いの成果、体がやや大きくなり、翼が生え、元のマルクとなった。

マルク「すべてを・・・壊しつくすのサ・・・!!」

ついに動き出す・・・!!!

第4章「絶望色に染まる宇宙^{ひそ}」

ドロツチエ達は引き続きキラメキマウンテンを上っていた。

スピン「ああ、いったいどうするんでチュかね、これから・・・。」

ストロン「それ以前に残り何kmなんだも？」

ドク「ええつと・・・残り3055kmなのじゃ。」

ストロン「ええゝ・・・まだそんなに・・・。」

彼らは完全に疲れ切っていた。

ドロツチエ「よし、いったんあそこの岩で休憩しよう。水はあるか？」

スピン「まだ十分にあるでチュよ。」

ドロツチエ「そうか。んならば早速休もうか・・・。」

ドロツチエ達は目的の岩に到達し、そこで少し休んだ。

ストロン「ふう、すんごく疲れたも・・・。」

ドロツチエ「水分を十分に補給しなくては・・・。」

ドロツチエは水筒のふたを開けて飲もうとした。

とその時、水筒の水の中身が後る雨期にどんどん流れこぼれていった!!

ポトトトトオーッ!!!

ドロツチエ「うわあっ!?!あ、ああ!?!」

ドロツチエは後ろから風を感じ、後ろを見ると、そこには謎のブラツクホールがあった!!!

ドロツチエ「な、なんじゃありや!?!ぐおおっ!?!」

ストロン「だ、だんちよおおーっ!?!」

ドク「によおおーっ!?!」

ズオオオオーッ!?!

ドロツチエ団は必死に岩をつかんだが、岩ももろとも吸い込まれ、ドロツチエ団は全員ブラックホールへと吸い込まれていくのであった。。。

。。。

。。ん。。?

しばらくしてドロツチエは起き上った。

と思ったが、ドロツチエは起き上げる必要はなかった。

そう――ここは無重力空間の「宇宙」にいるのだから!!

ゴオオオ。。。

ドロツチエ「ここは。。宇宙。。?」

ドク「団長!!後ろを見るのじゃ!!」

ドロツチエ「え。。.?あ、ううわ。。。」

ドロツチエが目の当たりにしたのは、「ギャラクティクノヴァ」が目をつぶっている姿であった!!

その真後ろには、暗黒物質が漂っていた。。。

ドロツチェ「な、なんでノヴァがあるんだ・・・？それに、後ろのやつは・・・。」

???「ひゃゝっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃあぁゝっ！！！！」
ドロツチェ「だ、誰だ！？」

ドロツチェはあたりを見回すが、その姿は全く見えない。

???「ヘイヘイヘイ、ここなのサ、ここ、ここ。」
ドロツチェ「は？」

ドロツチェはそれにつられて後ろを振り向く。
その瞬間、無数のブーメランカッターが飛んできて、ドロツチェの体を細かく切り裂いた！！！！

ズシャ、ズシャ、ズシャアアアアッ
ドロツチェ「ぐわぁーっ！！！」
スピン「だ、団長ーっ！！！！」

団員達はドロツチェのもとに駆けつける。

???「ヘイヘイヘイ、どうしたのサ？」
ドロツチェ「ぐ・・・お、お前は・・・マ・・・マル・・・ク・・・
！！！」

マルク「そうなのサ！！その通りなのサ！！」

彼らの目の前にいたのだ。ほかの誰でもない。そう、「マルク」なのだ！！

ドク「団長、その体じゃ・・・。」
ドロツチェ「で、でも・・・。」

マルク「ヘイヘイヘイ！！僕に攻撃しようってかい？それは駄目なのサ」

マルクはドロツチエを挑発する。

マルク「僕は壮大な計画を立ててるのサ！！」

スピン「な、何の話でチュか！！」

マルク「とりあえず教えてあげるのサ！！それは、僕の友達の「ゼロくん」を蘇らせることなのサ！！」

ストロン「そんなの、だめだも！！」

マルクは自分の計画を自らドロツチエ団に明かす。
それを聞いたドロツチエ団は仰天し、必死に反論する。

ドロツチエ「あ・・・あの子供が・・・そんな力を・・・」

マルク「君たちがあんなところで縛り付けるのがいけないのサ！！僕は君たちを恨む・・・！！そしてこの世のすべてを恨む・・・！！」

！だからゼロくんと一緒にこの世界を滅ぼすのサ！！

マルク「そのためにはギャラクティックノヴァの力をすべて吸い取る必要があるのサ！！これで、ゼロくんは甦るのさ・・・！！」

なんと、あの後ろの暗黒物質はギャラクティックノヴァを吸い込むためのものだっただ！！

ドロツチエ「な・・・！？めんどくせえことを・・・。子供のくせに・・・なにいいやがる・・・。」

マルク「だ、だまるのさあっ！！」

マルクはキレてカッターをすぐに切り出した！！

ドロツチエらはなんとかよけたが、体力はもうない。

マルク「君たちは、冗談抜きに死んでもらうのサ!! 僕の心を、傷つける奴なんて、さつさと消えるサ!!」

ドロツチェ「ああ、いいだろう・・・ただし、俺に・・・勝てたらな・・・。」

ストロン「団長!! いっちゃだめも!!」

ドロツチェ「だめだ・・・。行かなかつたら、事が進むだけだ・・・。俺は行く・・・!!」

スピン「団長・・・。」

戦いが始まった!!

マルク「んじゃ、さつそく「カッター連射」!!!!」

シュパパパパッ!!!!

マルクは、体内から無限に繰り出す「カッター連射」を繰り出した!!

ドロツチェ「早速厄介なものを・・・。「シューティングスター」!!」

ドロツチェも3つのあの星で何とか耐えることができた。

「無数VS3つ」!!

それぞれの攻撃が、互いに押し合う・・・。

そして、ついに隙ができる・・・。

チュガガガガッ

ドロツチェ「ぐ・・・腕が・・・。」

マルク「隙あり!!」

ドロツチェ「なっ!?!」

スパパパパアアーンツ
ドロツチエ「あああーっ！！！！」

ドロツチエは全身に深い傷を負った。
だが、苦しむ暇はない。

マルク「ふぎやー」なんだかとても愉快なのサ」
ドロツチエ「黙れえ！！スターエネルギー放射！！！」

ドロツチエは、いままでためていたエネルギーを一気に放出する技を繰り出した！！

マルク「うわあっ！！でも、こつちには秘技があるのサ」乱れ撃ちアロー！！！！」
バアアアーンツ

ドロツチエ「なあ・・・！？？」

ドロツチエの技を貫通され、マルクの秘技がドロツチエに襲いかかる！！

その矢はドロツチエの体に無数に刺さった！！！！

グサグサグサグサグサアツ！！
ドロツチエ「ぐはああーっ！？？」
スピン「だ、だんちよおおーっ！！！！」

ドロツチエはゆっくりと、ゆつくえいと後ろにガクツとさがり、よろめいていく。
まるで弁慶の立ち往生かのように・・・。

ドロツチエ「あ・・・ああ・・・。」

マルク「あひやひやひやひや」なんとなく愉快なのサ」

マルクは超上機嫌の様子。

ドロツチエ「カ・・・カー・・・ビィ・・・」
「バタアッ！」

ストロン「だんちよおおおーっ！！！！！！」

ドロツチエは「カービィ」という言葉をつぶやき、そのまま後ろ向きに倒れこんだ。

とその時、あの金色の羽根が降臨した！！

キララアアアーンツ

マルク「ん？あれはなんなのさ？」

そして、金色の羽根ともうひとつ降臨したものがある。

それは「紫の羽根」であった。

その2つの羽根はギャラクティックノヴァのエネルギーの一部を吸い取り、力にした。

そして、それぞれが輝きだす・・・。

ピッキアアアーンツ

マルク「な、なんなのサ・・・！？」

シュウウウ・・・

光の中から現れたのは、あの・・・

ゴーガシャカービィ「カービィ・・・ここに降臨・・・！！」

ゴーガシャシャドーカービィ「シャドー様も・・・降臨ですぜ・・・

！！」

マルク「お、お前らは・・・!! ああああーっ!!」

な、なんとあの時消滅したはずのカービィが、目の前に・・・!!
そして、そこにはシャドーカービィの姿もあった・・・!!

ドク「おお!! あれはカービィではないか!!」

ストロン「シャドーまで・・・!!」

スピン「本当に良かったでチュ・・・。」

ドロツチェ「ぐ・・・カ・・・ビィ・・・。」

4人はカービィの後ろ姿をじっと見つめていた。

マルク「おによれおによれおによれえ!! 僕の計画内にこんなやつ
らはないってないのサ!! こうなったら「マルキングバスター」で
一気に片付けるしかないのサ!!」

マルクは、口からそれらしきものを光らせる。

最後の決戦だ!!

マルクは口を大きくあけ、「マルキングバスター」をものすごい勢
いで発射した!!

チュツゴオオオオーツ!!!!

ゴーガシャカービィ「シャドー・・・!!」

ゴーガシャシャドーカービィ「僕の鏡・・・!!」

ゴーガシャカービィ&ゴーガシャシャドーカービィ「ダブルリバー

スミラーズ!!!」

パアアーンツ

カービィ2人で一気に倍返しする「ダブルリバー スミラーズ」であ
の技を跳ね返した!!

ゴオオオオーツ

チュツガアアーンツ

マルク「によわああーっ!!!!」

ジジジジイーッ

マルクは相当のダメージを喰らい、そして・・・

ゴーガシャカービィ「行くぜ・・・!!!!」

ゴーガシャシャドーカービィ「ああ・・・!!!!」

ゴーガシャカービィ&ゴーガシャシャドーカービィ「必殺・「ダブルフューチャークラッシャー」!!!!!!」

チュガガガガアアーンツ!!!!!!

カービィ2人は同時にフューチャークラッシャーを放った!!

そのままマルクへと突っ込んでいく・・・!!!!!!

ドガガガガアアーンツ!!

マルク「グギャツハアアアーンツ!!!!し・に・た・く・な・い・の・サアアアアーンツ!!!!!!」

バアアアアーンツ!!!!!!

マルクはカービィ2人の光線に押され、そのままギャラクティックノヴァへと突入する・・・。

そして、ついにギャラクティックノヴァの外壁を突き破り、内部の中心核へと突っ込んでいく・・・。

そして、ギャラクティックノヴァが・・・

ピッキアアアアーンツ!!!!

チュツドドドドドキアアアアアーンツ!!!!

ボツゴオオオーンッ!!!

ギャラクティックノヴァもろともマルクは闇の中に消え去った。
そして、あの暗黒物質もいつの間にか消えていった……。

シュウウン……。

ドロツチエ「カービィ……。」

カービィ「ドロツチエ、約束通り、戻ってきたぜ……!!」

スピン「カービィ……!!」

ストロン「なんかなけるも……。」

みんなカービィに集合する。
だが……。

シャドーカービィ「おいおいおい、俺にはないのかよ……。」
ドク「わしがいるわい。」

シャドーカービィ「お前みたいなじじいがいてもなあ……。」

シャドーカービィは頭をかきむしる。

カービィ「んじゃ、シャドー……。」

シャドーカービィ「一件は片付いたことなんだし、鏡の国に帰るわ・
……。」

シャドーカービィは、すたこらさつさと鏡の国への次元の扉を開く。

シャドーカービィ「おれさまの鏡よ、また会えるといいな……!
!」

カービィ「シャドー……!!」

シャドーカービィ「んじゃあなあ!! See you!!」

ブウンッ

シャドーカービィは鏡の世界へと帰って行った……。

カービィ「さよなら、シャドー……。」

ドロツチエ「……さてと……さつさと……早くポップスターに……帰ろうぜ……!!」

スピン「そ、そうでチュよ!!」

ストロン「さつさと帰るも!!」

ドク「んじゃ、さつさとやるのじゃ。」

カービィ達はワープスターでポップスターへと帰って行った……。それから半日後（12時間後）……

カービィはデデデ城付近のがけでデデデと一緒に夕日を眺めていた。

カア、カア、カア

デデデ「ああ、夕日がきれいだあ……。」

カービィ「そうだねえ……。」

パラワド「そうっスねえ……。」

彼ら3人はのんびりと語り合う。

パラワド「そういえば、いつ星のカービィWiiいつ発売するんスカねえ……?」

カービィ「あ、いわれてみれば……。でも、そんなことより久しぶりに「星のカービィ3」やらない?」

デデデ「古っ!!おまえどんだけかつちゃ!!!!」

すかさず突っ込むデデデ。

カービィ「んまあとりあえず城に戻って3プレイしようや!!」
パラワド「それ、名案ツスねえ!!」

デデデ「ああ、「3」本当に起動すんのか・・・?十何年も前だし・
・・・」

カービィ「んまあ関係ないじゃんゝんじゃ、さっさと戻ろっう!!」

カービィたちは城へと戻っていくのであった・・・。

カービィたちのいたがけに、一枚のガラスが落ちてきた。

パリンッ

???「ふふふ・・・」

つ、ついにカービィが帰ってきた!!

いままでドロツチェを圧倒していたマルクをカービィとシャドーカ
ービィの2人であつという間に倒したカービィたち!!

そして、再び宇宙に平和が訪れた・・・。何の変哲のない、普通の
一日に・・・。

しかし、彼らの戦いはまだ終わらない。常に危険と隣り合わせの彼
らに、油断は禁物なのだ。

サラバ、カービィ!!また会える日まで!!

——そして新たななる脅威が、カービィ達のもとへ・・・

完
!!
!

（後書き）

こんにちは！！作者の零物質です！！

この小説を読んでくださってありがとうございます！！

この小説、どうだったでしょうか？できればご評価をお願いします。
これからの僕の活動の力になります。

それと、僕のこれからの小説のスケジュールを・・・

3月13日：「4つの魔動派」連載開始

5月GW：「星のカービィ ゼロの復讐劇ⅠⅠⅠ」掲載

7月末：「ティンクルポポ2」掲載

8月頃：「星のカービィ ゼロの復讐劇ⅠⅤ」掲載

10月初旬：「4つの魔動派」連載終了

10月中旬：「琉球ファイナルファンタジー」連載開始予定

では、引き続き僕の活動を温かく見守ってください♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3686g/>

星のカービィ ゼロの復讐劇II -復活-

2010年12月1日06時26分発行